

蕪栗沼自然観察

責任者 見上一幸

1997 年以来、6 回目になる蕪栗沼でのフレンドシップ事業は、この間方法について試行錯誤を繰り返してきた。今年は、少しでも多く現地を訪問し、事前に経験や体験を深めておくことが、子どもに対して気後れせずに、子どもたちと自然を楽しむゆとりを生むと考え、これまで 2 回の現地実習を 3 回とした。第 1 回を自らが自然に親しむこと。第 2 回は、指導者の下に子どもたちとともに生物調査を行った。その後に自分たちで子ども向けの資料作成を通してさらに理解を深めた。その効果があっただけでなく、例年に比べ学生の反応は満足度が増したという印象を得ており、時間をかけて身近な自然に入り込めるようにとの配慮は、一応の成果があったように思われる。



蕪栗沼でのフレンドシップ事業風景

授業の流れと現地での学習

- (1) 環境教育 B として、講義全担当者の講義の後、5 月 29 日(水)には受講学生に対して事前説明を行い、さらに土曜日などを使って数回の事前研修を行った。
- (2) 第 1 回に現地実習(6 月 8 日)では、調査というのではなく、地元 NPO の協力で仕掛けで魚を捕り観察、また、散策して植物や鳥を眺め、自然の中でゆったりと過ごした。ここではゆっくり進む時間、見慣れた世界の中での生き物とのさまざまな出会い、自然の美しい形と色、匂い、触れたときの感触など、日常生活と異なる世界に浸った。
- (3) 第 2 回現地調査(6 月 22 日)は、蕪栗沼近隣の水田の生物調査を目的とした活動を行った。調査は、水生昆虫、クモ、カエルについて、種類と個体数について畦を歩きながら計測した。この調査により、調査対象の生物に注目することによって、数量の変化として捉えることができた。また、ここでは地元の小中学生(約 10 名)も参加し、フレンドシップ事業で子どもたちに指導するための事前実習ともなった。
- (4) これらの体験をもとに、フレンドシップ事業本番(6 月 29 日)に向けて、大学の教室においてフレンドシップ当日のための資料作りをおこなった。ここでは学生は 3 グルー

プ、すなわち、「沼の中の小さな生物」「蕪栗沼の植物」「蕪栗沼でよく見られる鳥」に分かれ、すくなくともそれぞれの分野では、子どもたちの相談相手になれるような準備をおこなった。

- (5) 蕪栗沼自然体験のフレンドシップ本番では、地元小学生16名が参加し、午前中は蕪栗沼で自然観察を行った。学生と子どもたちを3つのグループに分かれて行動した。午後は中央公民館に移動して、ホールで今日発見したことをそれぞれのグループが、壁新聞形式で作成し、グミや桑の実で絵を書いて添えたり、グループごとにユニークな作品ができた。学生も子どもたちもすっかり打ち解けて、楽しい気であった。

学生たちにとってのフレンドシップ事業

学生たちの授業後の感想から、学生たちにとってのフレンドシップ事業がどのようなものになっているか、考えてみた。

この授業では、日頃、自然との間で距離をおいている学生たちが、自然の体験をゆっくりと味わって欲しいと思っている。蕪栗沼というフィールドでどのような気持ちになったかを伝える感想がある。例えば、「私も初めてウシガエルのおたまじゃくしを見た時、心からすごいと思い、驚いたし、アジアイトトンボのヤゴを見たときには、“おしりの方が三本に分かれているのはえらなんだよ”と聞いて、今まで知らない世界が見えてきたようで、心から感激したものだ。もっともっといろいろな体験をしたいと感じた。(IS)」とか、「私も子どもたちとおたまじゃくしやヤゴといった水生昆虫や、今まで見たことも聞いたこともなかった植物を目の前にして、まるで子どものころに戻ったみたいにはしゃいでいました。(SM)」この授業の中で進歩の見られたものもある。その一人の感想として、最初は「私は実は虫や見た目が気持ち悪いようなは虫類などが苦手で、触るところか直視こともままなりませんでした。そのため、環境教育の授業をとったものの、フレンドシップ事業で子どもたちと一緒に自然と触れあうとき、うまくやれるかとても不安でした。」といていたものが、後半では「子どもたちともすぐに打ち解けられて、自分なりに満足のいくようになった。苦手だった虫やウシガエルの大きなおたまじゃくしもなんとか扱えるようになった」と評価している。この進歩の過程には、事前実習が役立ったということであった。

しかしその一方で、最後まで自然との距離をおいたままの学生もいた。「私が小学生の時以来、苦手なカエルに自分から近づいていったことがなかったので、我慢をすることを覚えました。これからは教師になった時にぶつかる課題かも知れないので、限界まで我慢しました。(UM)と、楽しめたというのではなく、我慢して耐え抜いたようである。

子どもの姿に、発見もあったものも見受けられた。例えば、自分が子どもの頃、トンボやコガネムシ、カマキリなどたくさんの虫を集めるのが大好きだった学生は、子どもたちと虫をとるのを楽しみにして参加した。しかし、実際に子どもたちと作業をはじめたときに、田舎に住む子どもたちの中にも「虫が怖い」という子どもがずいぶんいることにたいへん戸惑ったと云っていた。

教育大学の学生だからと云って、必ずしも子どもが好きとは限らない。例えば、「私はこのフ

フレンドシップにあまり乗り気ではありませんでした。それに正直いうと私は子どもがどちらかというと苦手なほうで、今回のフレンドシップで子どもとどういうふうに接したらいいのか、と不安でいっぱいでした。」(SM)と云う学生もいました。しかし、フレンドシップを終えてその学生は、帰りの印象として“バイバイ。またね?”と云っていた子どもたちにまた来年も会えたらいいな。」という感想を残している。

今回は、地元のNPOに所属する方々の支援も頂いた。例えば、その中の一人、戸島氏の助言についての感想もあった。「指導して頂いた戸島さんの言葉が印象的に残っている。“先生が自然で、私たちはアシスタントだ。知識を教え込むんじゃなくて、いつの間にか勉強になっているということを目指すんだ。学ぶのは本人。そして、自然と触れ合うことで、自然を身近に感じられるように、大切にできるように、ということはこのフレンドシップは目的としているんだ。”というようなことを戸島さんは云っていた。(IS)」と云っている。



田尻町公民館での午後のグループ活動



田尻町公民館での午後の発表会準備

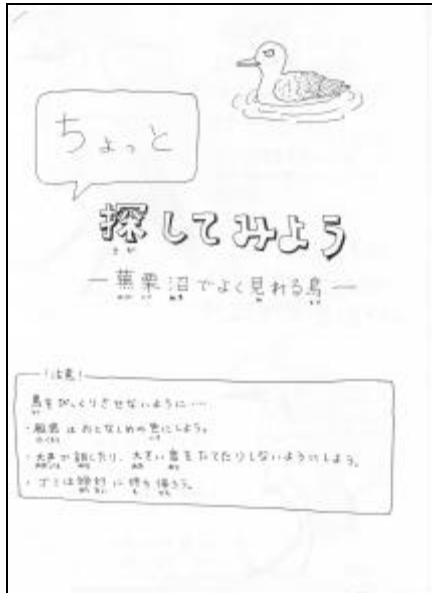


グループ発表を終えて



参加者全員での記念撮影

フレンドシップ用に学生たちが用意した学習資料の表紙



鳥を観察するための資料



水中微小生物を観察するための資料



植物を観察するための資料



カエル調査のための資料

平成14度フレンドシップ事業実施要領

蕪栗沼自然観察	(代表責任者 見上一幸)
参加学生	8名
学生指導	水生昆虫(岩淵成紀:宮城県田尻高校) 鳥類(戸島 潤氏:蕪栗ぬまっこクラブ) 微小生物(見上一幸:宮城教育大学) 魚・植物(鈴木耕平:蕪栗ぬまっこクラブ) (スケッチ指導助言 幕田明子:デザイナー)
対象	主として田尻町内の小学校教育徒
主催	宮城教育大学環境教育実践研究センター、田尻町教育委員会
期日	5月29日(水) 事前説明会 228番教室 6月 8日(土) 現地実習 6月12日、19日、26日(各水) 教材研究 6月22日(土) 現地事前調査 水田を中心に調査:水生昆虫、クモ、カエル 地元の小中学生も参加(約10名) 6月28日(金) 実施準備 6月29日(土) フレンドシップ事業 対象 地元小学生16名 10:00 田尻駅集合、蕪栗沼へ移動 10:30? 12:00 蕪栗沼自然観察 12:00 中央公民館に移動、 昼食 13:30? 14:30 まとめ・発表会 14:30 子どもたち解散 15:00 学生、田尻駅で解散
内容	蕪栗沼の生きもの(水中微小生物・水生昆虫・水辺の植物、 両生類・爬虫類、魚類、鳥類)を調査し、郷土の自然を通じて 自然環境の理解を深める。

フレンドシップ事業の5年間を振り返って

宮城教育大学でのフレンドシップ事業は、1997年にはじまった。環境教育実践研究センターのフレンドシップ事業も他の2事業とならなではじまり、このときテーマが蕪栗沼自然探検である。このときから、環境教育という授業の中で実施され、受講学生は30名であった。1998年には、蕪栗沼自然実験の他に、仙台市科学館特別展チュータ、タンポポ調査、芦口小学校水田実習などのコースをつくり、受講学生数も68名となった。1999年は、他のコースも開設され、私の担当するコースは蕪栗沼自然実験のみに、2000年は、蕪栗沼自然観察(15名)と志津川磯探検(7名)を担当した。その後は、他の教官によるコースが併設されえていることと、1コースに集中しフレンドシップ事業を深めるため、蕪栗沼をフィールドにした事業のみを行ってきた。

教養教育科目「環境教育a」(全学年対象)としてのこれまでの課題と現状

1. 学生の自然体験不足

授業のはじめに特に顕著なことは、自然フィールドに出て主体的に動こうというのではなく、ただ教官からの指示を待つ、どうしたいという希望が声にも行動にも出ない、大学でのおしゃべりに夢中になり周りの自然を気にしないなどである。子どもに伝えたいことも特に持たず、自然に向かったときに子どもたちの反応との格差も見られる。このような状態のまま子どもに対峙しても、学生の自然に対する理解は培われないように思われた。そこで、はじめは学生だけでゆったりと、なるべく少人数で自然に触れることのできる機会を作ったことによって改善されたように思われる。

2. 知識不足から来る問題点

本授業科目は、3、4年次の学生にとっては専門科目の時間と重なって受講が難しい。その結果、1年生が多い授業である。そのため、受講生の専門知識の不足からくる傍観者の姿勢が見られる。指導力不足により、子どもを満足させられない、そこで子どもの気を引くために遊び相手として対応してしまいがちである。この点、成功したのではないかと思うのが、1998年に行った仙台市科学館特別展チュータである。このコースでは、お金を払って来館する子どもの相手をすることによって、プロとしての自覚ができ、真剣勝負を迫られたからである。

今年のフレンドシップでもそうであったが、学生にとって、指導者として子どもたちの前に立つはじめての機会、どの学生も最初はたいへんな戸惑いがある。そこで自然とともに遊ぶのであればよいのだが、接し方がわからないので、短兵急に子どもご機嫌をとったり、いっしょに戯れたりする。

すぐく気軽にそして自然に子ども達と接することができるのが、よい面と悪い面がある。気軽に参加し、通常の講義を受けるような気持参加した学生も少なからずいる。学生といえども子どもと父母の前に立てば、いやおうなしにプロの卵として扱われ、大人の見目は厳しい。「父兄の方々は私達を環境のエキスパートと知っているようでした。鳥や植物のことを全く知らなく

て父兄の方々から質問されたのですが、答えられませんでした。」とか、「実際に沼に出かけると、多くの男の子たちは、鳥よりもお兄さんと遊ぶことにばかり気が行っている。それぞれにお気に入りのお姉さんやお兄さんがいて、なかなか鳥には気が向かないようだった。」あるいは「炎天下の下で疲れきった様子で、つまらないんだな、と思った。自分の力不足を感じたし、残念だった。ただの馴れ合いで、せっかくの蕪栗沼との出会いのチャンスを無駄にしていたように思う。」とか、学生の感想に現れている。

3. 教室で講義を受けるよりも外に出たいという講義逃避型の受講生が多い。

このような状況が必ずしも悪いとも言えないし、これをフレンドシップでどう活用していくかが課題である。現地実習の時間や事前研修の時間を増やすことによって、内容が充実するだけでなく、講義形式の授業より楽ではないと印象づけることで、単位を取りやすいという安易な考え方を排除できるものとする。

4. 事前準備のやり方に反省すべき点が残る

フレンドシップ事業をはじめた頃は、事前準備が必ずしも十分でなかった。そのため、子どもへの助言者の立場に立ったときに、自分の技術的な未熟さに不満を残すものもいた。それは、例えば、「ボルボックスやミドリムシを顕微鏡で見ても何もうつってないことが多くて子供たちががっかりしていました。もう少し自分達がりハ?サルをしっかりとしていれば、このようなことはなくてすんだと思う。」(学生TA)というような感想から知ることができる。この点を反省し、事前研修を工夫することによって、最近はその点は改善されてきていると思う。

5. 保護者同伴参加の是非

今回参加した子どもたちは郡部の子どものためか、都市部の子どもと比べると、全体としては引込み思案のような気がする。その子どもたちが保護者同伴での参加であったため、「父兄にべったりの子どもがいて、参加しようとしめない子どももいて、父兄とはある程度別れた方が、フレンドシップは成り立つのではないか。」という意見や、「余りにも大人たちが多すぎて子ども達が親に頼ってしまい、大学生が親を通してしか接触できないことが多かったと思う。子ども達は、分からないことがあったり、質問があったりしても私たちではなくどうしても聞きやすい親に聞いてしまうことが多く見られた。だから、今度は、私たちと小人数の大人たちだけにしてもらってもう少し子ども達と大学生の距離を狭くすべきである。」(学生MK)という意見があった。このような状況は今もあるようには思うが、6年前に感じるほどには現在は感じない。うまく活用することで、おじいさん、おばあさんと孫との距離の短くする効果や会話の機会を与えることができるとう効果も期待できる。

6. 連携機関との関係

このフレンドシップ事業は、連携機関の協力がなかったら実行できなかった。例えば、蕪栗沼自然探検では、開催地である田尻町教育委員会が子どもたちへの案内、募集を担当して下さることから、大学は学生の事前研修に専念できる。また、率直な意見、例えば、「フィールドでの学

生の指導を見て、できれば子どもに教えるという観点から強弱を付けて欲しい。」などを聞くことができる。毎回、基本的な点についての指摘であり、これらを真摯に受けとめ、次年度のフレンドシップ事業に生かすよう努力してきた。

7. その他これまで心掛けてきたこと

特定の学校を対象にした事業を敢えて組まなかった。これは学校でのお勉強としないため、また、参加大学生が単なる学校ゲストになってしまわないかという不安を除くためである。

これまでに参加した子どもには、敢えてレポートや感想を課さなかった。これは、この手の作業は学校でうんざりしているだろうと思ったからで、その分素直に自然に親しんで欲しいと考えたからである。

フレンドシップ事業では、子どもたちに学生の適切な対応がなければ、子どもたちはふだん外で遊んでいるのと変わりなくなる。学生の資質をどう延ばすかが課題であると考えてきた。

本フレンドシップ事業で良かった点

非日常の自然体験の中で、子どもたちが我を忘れて夢中になる。例えば、雨の寒い中をずぶぬれになりながら水生昆虫採集に夢中になり、腰が伸びなくなって動けなくなってしまった子どもがいた。このときポケットに手を突っ込んで、川に入ることもせずに眺めていた学生は、この光景に大いにショックを受け、自分の態度に気づき、大いに反省したという事例もあった。このような意味で、子どもは時として素晴らしい指導者にもなる。フレンドシップならではの学習場面である。

また、継続して実施してきたことにより、地域との信頼が生まれ、学校、教育委員会、地域のそれぞれが、大学とともに地域の子どもたちを考える連携が生まれ、将来教師を目指す学生に教育の場を提供して協力しようという気持ちも生まれているように感じる。

今後に向けて

今後、できれば数日間の滞在型として、集中しての自然体験が必要と感じている。その場合、臨海実習型つまりメニュー消化型ではだめで、合宿制にして時間をたっぷり使うことを考えてみたい。このフレンドシップでは、日常の自然の中での非日常の発見、驚き、疑問を抱くことが重要で、これにもある意味でのトレーニングが必要だと考えている。

蕪栗沼フィールドでは、学生が子どもたちとともに自然を体験するものとしてすでに5年を経過した。学生は毎年変わるが、地元の子どもたちの中には、毎年参加するリピータもあり、企画に慣れてきている。この慣れを今後どう生かすかが課題で、ますます、学生の力量が問われる。

実習後の反省会でも、子どもたちに聞くと異口同音に楽しかった、またやって欲しいと言ってくれた。しかし、実際には物珍しさと、お兄さんお姉さんと遊んでもらって楽しかったという部分が大きかったことも考えられる。単に子どもに迎合することのないよう、学生に力をつけることが大切である。

学生たちにとってはどうであったであろうか。「実際に蕪栗沼に行ってみて、私の家から歩いていける距離だったのに、そこに野鳥がいるということも知りませんでした。自然に恵まれた地域に住んでいながらも、いかに自分が自然に無関心だったかに改めて気づかされ、はっとしました。」という学生もいる。参加した全学生が、異口同音にこの事業が有意義なので継続してほしい、チャンスがあればまた出席させて欲しいとっており、おおむね肯定的である。教室で講義とは異なるメッセージを学生たちに伝えていることには手ごたえを感じている。